

[資料]

平成26年度教職大学院協会研究大会 報告

教職大学院の学びの状況と研究について

報告者 江頭雄一郎

(平成26年度福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻生徒指導・教育相談リーダーコース修了)

(2016年1月29日受理)

平成26年12月6日(土)に東京都港区「東京工業大学キャンパス・イノベーションセンター」で、12月7日(日)に東京都千代田区「学術総合センター」で、平成26年度日本教職大学院研究大会の実践研究成果フォーラムが開催された。

12月6日(土)は、教職大学院の「授業における実践的な教育の紹介」「実践研究の成果の公開」「プロジェクト研究の公表」が行われた。また、12月7日(日)は、「教職大学院における学修の成果と課題」というテーマで基調講演やパネルディスカッション、ポスターセッションが行われた。

本報告は、2会場での教職大学院の実践研究成果公開フォーラムと、8教職大学院のポスターセッションの内容を中心に報告する。

○ はじめに

報告者は、教職大学院協会が主催する研究大会に参加する機会を得た。専門職学位課程に学ぶ現職大学院生として、ミドルリーダーとしての役割が求められる現場の貢献のために研究や研修を行っている立場として、その概要、教員の資質向上への知見、自身の実践への学びの点から報告と考察を行う。

町野千恵子(岐阜大学教職大学院生)

大宮 学(岐阜大学教職大学院生)

平澤 紀子(岐阜大学教職大学院教授)

① 発表内容の概要

教職大学院のカリキュラムに位置づけられている「学校における実習」について、現職教員は教職経験により全部又は一部免除を行うことが多い。一方、岐阜大学教職大学院においては、大学院生という立場を活かし、スクールリーダーの資質開発を目指した学校改善に関する部分実習を課している。こうした取り組みを紹介し、現職派遣教員を対象とした実習のあり方について提案された。

② 教師の資質向上、維持に関する知見

岐阜大学教職大学院は、スクールリーダーとして貢献できる学校の中核的な高度教育専門職の育成を目指している。

その中で、「学校における実習」においては部分実習が取り入れられており、その意義として、学びを現場につなげる実践の場であること、教職大学院での学びを現場へ提案し、学校改善につなげる取組であることが示されていた。このことは、現職教員の勤務校の学校改善にも大きな意味をもったと言われていた。

学校経営計画の分野では、勤務校で校長・教頭・教務主任等の講話を聞いた上で資料を分析

I 公開フォーラムに関する報告

参加大会

平成26年度日本教職大学院協会 研究大会

開催日時

平成26年12月6日(土)14:15~17:30

会場

東京工業大学キャンパス・イノベーションセンター(東京都港区芝浦3-3-6)

1 発表題目

スクールリーダーの資質開発に向けた現職派遣教員の学校教育臨床実習~学校経営に資する実習の提案~

大学院名

岐阜大学教職大学院

発表者

三尾 寛次(岐阜大学教職大学院教授)

したり、自己省察を行ったりしたりしている。

また、現職教員による学校評価の自主研修においては、2年次に勤務校に戻り、教職大学院での学びとして勤務校の学校評価の現状と課題を提示し、改善策の提案を行うことなどもされており、学校改善につながる部分実習となっている。



## 2 発表題目

教育実践研究の質の向上を目指した取り組み～教育実践と省察のコミュニティー～  
大学院名

長崎大学教職大学院

発表者

呉屋 博 (長崎大学教職大学院教授)

堀之内利成 (長崎大学教職大学院生)

### ① 発表内容の概要

長崎大学大学院教育学研究科は、平成26年度から全課程を教職大学院に一本化し、高度専門職業人としての教員を養成するためのより充実した内容を提供できる大学院を目指している。

「子ども理解・特別支援教育実践コース」、「学級経営・授業実践開発コース」、「教科授業開発コース」の3つの各コースはそれぞれ定期的に学生同士の情報交換を行うとともに、年3回の専攻全体の研究経過・成果報告会では、学部生や学校の教師も交えた意見交流を図り、実践研究を深める取り組みについて紹介された。

### ② 教師の資質向上・維持に関する知見

本研究科は、2年の修業年限(2年プログラム)を標準とするが、この他に、これまでの教職の経験等を考慮した1年プログラムを開設されている。また、教員免許をもたないストレートマスターを対象にした3年プログラムも開設されている。

その中で、クロスセッションとよばれるコース毎の院生が主体的に運営する研究会を定期的

に公開で実施している。院生は輪番で実践研究や教育実践実習の中で表現力を高めるとともに、院生同士の意見交換や教員のアドバイスを受けながら実践的研究の質を高め合っている。

その他、年間3回の院生による実践研究の公開報告会も行われている。この報告会には、県下の教育関係者の参加も得ている。

その一つは5月頃に行われる中間報告会である。ここには、2年プログラムの2年の院生と3年プログラムの3年の院生が参加する。

そして二つは、夏から秋にかけて行われる教育実践と省察のコミュニティーである。ここでは、各コースが輪番でテーマを提示し、基調講演やパネルディスカッション、ポスターによる院生の実践研究報告などが実施されている。

最後に三つは2月に行われる教育実践研究成果発表会である。卒業年度の院生による、これまでの研究成果を発表する会で、引き続き研究を進め、発展させていくために、また、これまでの研究を学校現場で生かしていくために行われているものである。

さらに、ニュースレターを発行し、院生の取り組みを公表し、様々な声を求めたりもしている。取り組みは多岐にわたっているが、それぞれの研究の内容を高めるために多様な報告会等を行っていることは大変価値のあるものであり、学校現場でもすぐに生かせることができる実践的な研究となっている。



## II ポスターセッションに関する報告

参加大会

平成26年度日本教職大学院協会 研究大会

開催日時

平成26年12月7日(日)10:30～16:30

会 場

学術総合センター

(東京都千代田区一ツ橋2-1-2)

## 1 発表題目

児童期における自己価値・他者価値・自己主張性の関連

大学院名

創価大学教職大学院

発表者

坂岡 沙織

## ① 発表内容の概要

子どもが安心できる居場所を学校につくることは非常に重要であり、そこに欠かせないものが子どもたちの社会性である。本研究は、小学校中・高学年の児童を対象に、「自尊感情」「他尊感情」「自己主張性」の3つの関連を調査・分析し、子どもの社会性を伸ばすために小学校段階でアサーション・トレーニングをどのように導入すべきかという視点で発表が行われた。

## ② 教師の資質向上・維持に関する知見

生徒指導上の問題は、自尊感情や他尊感情に起因していることが考えられている。そのため、自尊感情と他尊感情、自己主張性はどのように関係しているのかを明らかにされた。ここでは、小学校段階において焦点化して伸ばしていきたいスキルが「自己表現スキル」であることが明らかになった。このことから、「自己表現スキル」トレーニングを行うことで高学年における自己価値、他者価値の向上がみられるようになるのではないかという考えが大変参考になった。また、自己表現につながるアサーション・トレーニングを導入することや、授業をはじめとした教育活動全体を通して、自分の気持ちを素直に表出させる活動を意図的に取り入れるようにするという考えも大変参考になった。

## 2 発表題目

思春期の ASD (Autistic Spectrum Disorder) の子どもたちの情動調整に向けた支援方法を探る

大学院名

静岡大学教職大学院

発表者

大石 真未

## ① 発表内容の概要

情動混乱のみられる ASD の中学生を対象に、根拠に基づき、誰もが実践可能な情動調整に向けた支援方法をめざし仮説の検証を行った。PDCA サイクルでの検証から見えた仮説の有効性と課題を発表するとともに、特別支援学校の教員である発表者が、特別支援学級でのアクションリサーチを通してみえてきた実践可能で

有効な連携の在り方についての考察結果も合わせて発表された。

## ② 教師の資質向上・維持に関する知見

気になる子どもがいたら、その行動だけを見るのではなく、原因と結果を十分に見ていく必要がある。そのために、子どもの様子についてのメモをためておくことで心理検査やその後の支援につなげていける。検査がゴールではなく、検査からが支援のスタートであるという言葉も心に響いた。

## 3 発表題目

生徒の自尊感情を育むカリキュラムマネジメントの研究—『よさっぴタイム』を中心とした学校教育活動を通して—

大学院名

愛知教育大学教職大学院

発表者

岡田 篤三

## ① 発表内容の概要

他者と関わり合いながら自尊感情を高め主体的に学ぶ生徒を育成するために、SST と SGE を統合した「よさっぴタイム」を開発した。そして、「よさっぴタイム」で身につけた対人関係のコツ・技術が、授業や行事、部活動などの学校生活の中で発揮できるように、意図的・計画的・組織的に組み込んだ学校カリキュラムを実践した。その結果、他者と関わり合う力を高めたり、自尊感情と各教育活動の相関を強めたりすることができた。

## ② 教師の資質向上・維持に関する知見

本研究は個人の研究ではなく、学校としての課題を解決していくための研究だった。発表者の在籍校において、生徒の自尊感情を高めるために、SST と SGE を合わせた「よさっぴタイム」を開発し、年回 30 回程度、5 限目の開始前に約 10 分実践している。このことを通して、生



徒の自己肯定感、自己有用感を高め、自尊感情を向上させているということだった。

また、学校で多くの時間を過ごす授業が生徒の自尊感情に関係しているということから、授業中には「よさっぴトーク」と言われるグループ内交流も取り入れているということだった。心理教育援助サービスとグループ内交流を通して、心と体の触れあいの場を設定している点を参考にしていきたい。

#### 4 発表題目

特別支援学校のセンター的機能を活用した小中学校支援に関する研究—センター的機能の3層モデルを通じた学校コンサルテーションの実際—

大学院名

福岡教育大学教職大学院

発表者

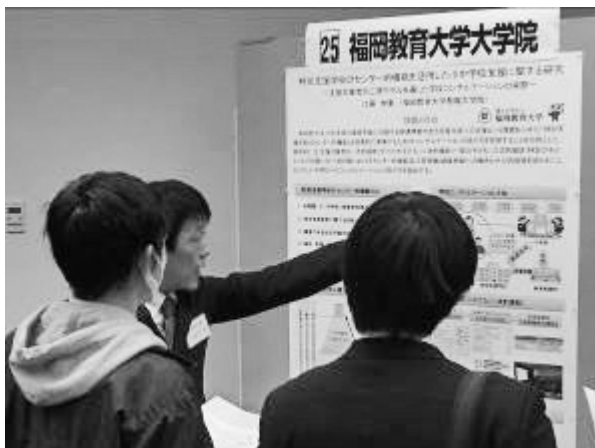
江藤 伸康

##### ① 発表内容の概要

本研究では、小中学校を対象に特別支援学校のセンター的機能を効果的に発揮するためのシステムの構築を検討している。特別支援学校のセンター的機能の内容を、一次的援助（すべての子どもが対象）、二次的援助（一部の子どもが対象）、三次的援助（特定の子どもが対象）の三段階に分け、子どもの実態に応じた支援を行う。有効性の検証は学校環境適応感尺度「アセス」を用い、子どもの適応感を基に研究の成果をまとめる予定である。

##### ② 教師の資質向上・維持に関する知見

特別支援学校のセンター的機能の内容が分かりやすく発表され、特別支援教育の推進に向けて密な連携をとっていききたいと思った。また、支援対象者の状況から一次・二次・三次という三層に分け、それに応じた支援について示されてあった。



実態把握のための学校環境適応感尺度「アセス」の活用、ケース会議のための行動支援シートの活用、外部機関との連携在り方等が明確にされており、教員・組織・管理職へのコンサルテーションも重要になることも示されていた。

在籍校の子どもたちのために、教師のために、そして組織のために、大いに参考にしていききたいと思った。

### III まとめ

本研究大会に参加し、今後、自身の実践や研究に役立てていきたい点として、以下の2点について述べる。

#### ① 特別支援教育の充実

在籍校では、校長のリーダーシップのもと、コーディネーターを中心に特別支援教育が充実してきているところである。

しかし、「個」に応じた支援を充実させたり、「個」の対応への組織としての動きを意識したりしている教員はごくわずかである。

生徒指導と特別支援教育は大きく関連していると言われている。現場に戻ったら、「個」のアセスメントの内容や方法、そして、組織としての「個」に応じた対応のシステムの構築等に積極的に関わっていききたい。

#### ② 体験活動の重視

福岡県の児童の課題と在籍校の児童の実態から、学級活動でソーシャルスキル・トレーニングを取り入れている。そして、必要とされる社会的能力を身に付けさせることで対人関係を良好なものへと高めていこうとしているところである。

学校全体でその必要性についての理解をさらに深めていき、位置づけられたカリキュラムを誰もが責任を持って実践していくことができるようにコーディネートしていきたい。また、現在実践しているソーシャルスキル・トレーニングと併せ、構成的グループエンカウンターやアサーション・トレーニング、その他の心理教育プログラムから、児童の課題を解決させるのにより適切なプログラムを選定して、全職員でのカリキュラム実施に向けた方策を考えていきたい。

さらに、学校生活の多くの時間を過ごす授業と自尊感情は大きく関連しているということから、誰もが「分かった!」「できた!」と思える授業づくりについても積極的に関わっていきたいと考えた。